

山陽新幹線0系のバリアフリー設備の覚え書き

(2014年3月作成)

◎作成・半沢一宣(はんざわ・かずのり)

*2008年11月30日限りで営業運転を終了した車両の記録です。

0系は1964年10月1日に東海道新幹線が開業したときからの車両で、最大16両編成で「ひかり」「こだま」として運転されました。

1974年4月に新製された27形(食堂従業員控室および車内販売準備室付き車両で7号車として連結)では東京寄りの太平洋・瀬戸内海側に車いすの人が乗車するための個室が設置されました。車いすのまま入れる広さがあり、また腰掛を手前に引き出すと窓下の跳ね上げ式いすと合わせて簡易ベッドを構成できるようになっていました。この構造は、後に各形式の車両に設置される多目的室の原型となりました(多目的室の内部の写真は「山陽新幹線100系のバリアフリー設備の覚え書き」に収録)。

1976年に新製された37形1000番代車(ビュフェ=立席形式の軽食堂車と普通車との合造車で9号車として連結)で、初めて車いす対応座席と多目的室が設置されました。これ以降、上記7号車の個室は車掌室代用として使用されました。

その後16両編成の一部が短編成化され、1985年には山陽新幹線区間の「こだま」用6両編成(後に一部は4両化)が、1989年には「ウエストひかり」用6両編成(後に12両化)が登場しました。

このうち「ウエストひかり」用改造では製造が比較的新しい車両が選ばれ、座席を横5列から4列に変更するなどの大規模なグレードアップが行われました。

このグループの車両が、2008年の0系引退まで残存していました。

車いす対応座席(次ページの配置図で「H」と標記)

3号車の12番A席(瀬戸内海側)とD席(中国山地側)に車いす固定用のロープが設置されていますが、通路側に回転せず肘掛けも固定式のため、車いすから座席への乗り移りには不便です。

多目的室(次ページの配置図で「M」と標記)

3号車の新大阪寄り(中国山地側)にあります。改良型ハンドル式電動車いすには対応していません。

車いす対応トイレ(次ページの配置図で「W」と標記)

3号車の新大阪寄りにありますが、ベビーベッド(おむつ交換台)などを併設した多機能タイプではありません。

洗面所

3号車の新大阪寄りにありますが、車いす対応構造と言えるかどうかは微妙です。

電話室(次ページの配置図で「p」と標記)

3号車の新大阪寄りにありますが、車いす対応構造ではありません。

飲料自動販売機

設置されていません。

受動喫煙の発生状況

1号車と6号車の2両が喫煙車です。

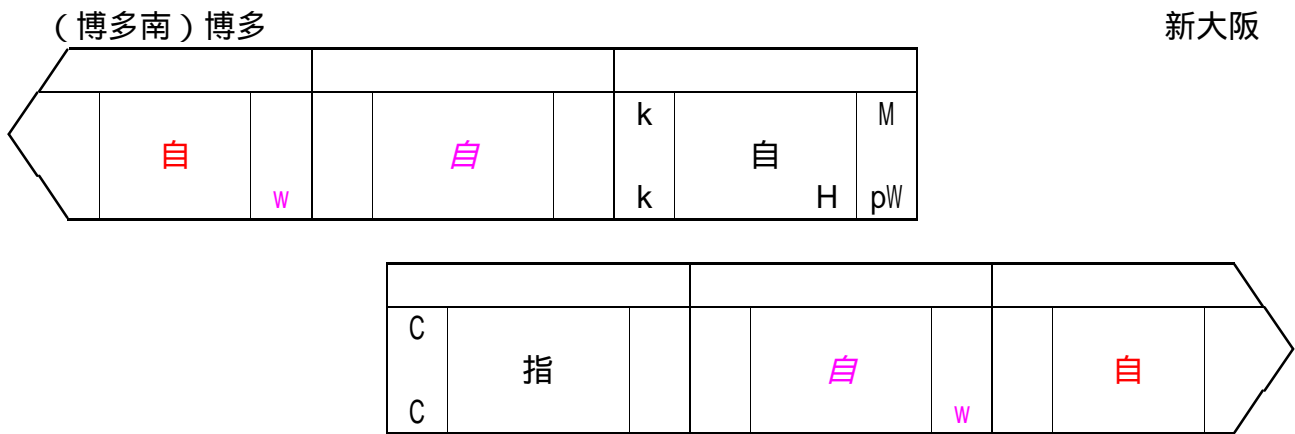
これらの隣の車両では、人が通り抜けるとき自動ドアが開くたびに、および空調装置を介してたばこ煙が流れ込むことによって受動喫煙が発生していることが、営業列車での粉じん濃度測定調査によって判明しています。

乗車・調査の実施記録

2007年11月10日(土曜日)新大阪6時30分発広島ゆき「こだま631号」
(新大阪駅発車前に調査・写真撮影)

車両番号・3号車 = 29-7902 (R67編成、1984年・日本車両製。2&2シート化などのリニューアル改造の履歴は未確認)

0系の車内設備の配置図



凡例

指 = 普通車指定席

H = 車いす対応座席

W = 車いす対応トイレ

P = 公衆電話(車いす対応)

C = 車掌室

自 = 普通車自由席

M = 多目的室

w = 車いす非対応トイレ

p = 公衆電話(車いす非対応)

k = 車内販売準備室

細字 = 受動喫煙が発生していない清浄な空気の禁煙車

斜字 = 受動喫煙が発生している禁煙車

(喫煙車または喫煙コーナーに隣接している車両と喫煙ルームがある車両が該当)

太字 = 座席で喫煙できる車両(いわゆる喫煙車)



山陽新幹線 0 系



車いす緊締用ロープ



0 系の車いす対応座席 (左 = 3 号車 1 2 番 A 席、右 = 3 号車 1 2 番 D 席)
デッキ寄りの 1 3 番 A D 席には緊締用ロープが無い点に注意



0 系の車いす対応トイレ



0 系の洗面所



0系の多目的室の外観
窓ガラスには車いすマークのステッカー
内部は未撮影だが
100系の多目的室と同じ構造と思われる



0系の電話室